

ピーサン

埼玉県狭山市 小林 千春

ふらりと入ったホームセンターの奥でペコリと頭を下げた人がいた。先日、冷やかして覗いたペットコーナーの女性店員だった。

「どうぞ見ていってください」

鳥かごを目で示している。見ると、極彩色の雛が身を寄せ合っていた。生後二ヶ月のインコたちだ。最初に白と水色のツートンカラーが目についた。震えながら動かずにいる様はいかにも虚弱な感じがする。一方、落ち着きなく動いては、あつちで小突かれ、こつちで小突かれしている黄色に緑の差しが入った雛がいた。

「その子は目が大きくて可愛いですよ」

女性店員がかごから取り出して、目の高さに持ち上げる。雛は途端におとなしくなつて、目をぱちくりさせている。

「インコってどれくらい生きるんですか」

「六、七年ですかね」

「そんなに短いんですか」

七年生きたとして、自分は六十歳。柿田は一瞬、ひるんでしまった。生きものとの別れは定年退職をなおさら寂しいものにすると思つたからだ。にもかかわらず「その子ください」と、気づいたときには口走っていた。きつと昨晚読み終わった『かもめのジョナサン』のせいだ。読後の興奮はまだ残っていて、この日は「生

きる目的を探せ！」などと内心で叫びながら帰り道を歩いていた。その流れでホームセンターには入ったのである。だから名前もすぐに決まった。ピーサン。異端とそしられながらも飛ぶことを止めず、限界速度に挑むことで自由を手にしたジョナサンにあやかったのだ。

だが、アパートに帰り着き、かごから出してやってもピーサンは羽ばたき一つしなかった。かすかに身を震わせながらその場で瞑目している。さしずめ「思念探し」といった風情だが、突然の環境の変化に戸惑い、混乱のなさかにあるのかもしれない。それとも、生き別れた兄弟でも偲んでいるか。いずれにせよ、そつとしておくことに決め、水と餌を置いたかごに戻してやって、この日は寝た。

朝七時にかごのカバーをはずし、敷物を取り換え、水と餌を新しくしてやればピーサンの旺盛な朝食タイムが始まる。その間、こつちも卵かけごはんを味噌汁と一緒に盛大にかきこむのが朝のルーティンだ。最初の頃はピーサンは食べる量も控えめで、何かと「思念探し」のポーズを決めていたが、いまでは食い足りねえとばかりに餌箱は投げるし、かごの中で暴れたりもする。餌のやり過ぎだけは注意するようになると言われていたが、その意味がわかつてきた。餌をやればやるだけ我慢がきかなくなるのだ。

もつとも、今朝は訳あって好物のカナリヤシードを追加してある。お陰でゆつくり食事ができるし、出かける前に部屋の掃除や洗濯もできそうだった。今日は稲本女史と会う約束になっている。

ピーサンはじめてしゃべったのは、飼い始めてひと月が過ぎた頃だった。メスの鳴き声を真似ることでおスは相手の気を引き、交尾へと至る。モノマネすることは、インコにとって生きることそのものなのだ。と女性店員は熱を込めた。だから話しかけてやれと。そこで「ピーサン、かわーい」とか「いいこちゃん」とか、女性に扮して毎日声をかけた。するとある日、「じゃーね」との呼びかけに、「ピーサン、カッワイ、パッパパー」と返してきたのである。パッパパーの意味はまだにわかっていないが、その日はパートのおばちゃんたちの話題はピーサンで持ちきりになった。

「ピーちゃんは頭がいいんだよ」

「ちがうよ、彼女だと思ってるんだよ」

「まさか柿田さんかい？」

そこで笑いが起き、ハンバーグソースが容器からはみ出てるじゃないですかと、例によって稲本女史からの叱責が入った。

この日はチキンカツを揚げ過ぎて焦がしてしまい、稲本女史にどやされたばかりだった。六つも年下なのに給菜コーナーへの配属が二年早いというだけで先輩気取りする独身女性だ。黒縁のところが眼鏡をかけているから冗談で女史呼ばわりしたらその気になって、以来、何かとマウントを取ってくる。その稲本女史から昨日、姪っ子にインコを見せてやってほしいと頼まれたのである。

「あしたの日曜日はどうかしら」

「仕事が終わってからですか」

「姪は小学五年生よ。夜はだめ。二人とも病休ってことにしましょ」

結局、十時に上総更級公園で会うことになった。

菜の花畑の中を二両編成のトロッコ列車が進む——。そんなポスターを目にして以来、小湊鉄道は柿田の憧れとなった。その小湊鉄道の始発駅五井に越してきたのが十年前。いまはその五つ先の駅、光風台にあるスーパーマーケットに勤めている。

十年前といえば五井駅東口の再開発が盛んな頃で、大型電気店やホームセンターの建物に加え、上総更級公園の整備が進んでいるときだった。その公園がいまでは市民のオアシスとして定着し、休日には多くの人を集めている。

アパートを出て十分も歩くと公園に着いた。公園の入り口には案内図がある。指定された（木もれび広場）は池の手前に見えた。

「柿田さん、こっちこっち」

池を見下ろす高台にはベンチ付きのテーブルが二つ置かれていて、その一つから派手に手を振られた。つば広の白い帽子に薄桃色のスカーフ。顔の印象が違うのは、眼鏡のせいかな。黒縁のところが眼鏡ではなかった。ブルーグレーの金属フレーム。形に丸みがあり、稲本女史の表情もどこか柔らかい。

対して隣でアメリカンドッグにかじりつく女の子は不愛想そのものだった。挨拶を促されてもこちらにじっと目を当てるだけで何もしゃべらない。「心」に「愛」と書いて「ココア」。妹夫婦の一人娘とは聞いていたが、いじわるそうに見える。二つ結わきにした髪には水色とピンクという色違いのリボンがそれぞれに付いているが、ちっとも可愛くない。そんな思いが伝わってしまった

のか、ココアはぶいと顔をそむけ、アメリカカンドッグの周りの生地だけをはぎ取る作業に熱中し始めた。昨夜は仕事帰りにキャリーケースなる移動用鳥かごまで購入したのに、ココアはそれには見向きもしなかった。

「お飲み物でも買ってきますが、何になさいますか？」

表情も違えば声のトーンも違う稲本女史が腰を浮かす。思わずココアで、と言いそうになるのをこらえ、「すみません。ではウーロン茶で」と無難に返す。

「ピーちゃん、可愛いわね」

ミルクティーを手にした稲本女史がココアに声をかける。

「べつに」

すでにピーサンのお披露目タイムが始まっていたが、あんなに見たいって言ったのに、という稲本女史の言葉に、そんなこと言ってない、と返したのはココアだった。

餌は何を食べるの？ 鳥って、どうやって寝るの？ 質問を投げかけてるのはもっぱら稲本女史だった。ココアは串にウインナーだけを残すところまできて満足そうにしている。

「ピーサン、カッワイー」

稲本女史とココアが同時に顔を上げる。

「えっ、いま、しゃべった？」

ココアが言うと、「ピーサン、カッワイー、パッパパー」、ピーサンがなおもしゃべる。

「伯母さんが可愛いって言ったから？」

「そっか。ピーちゃんって頭いいのね」

「ほかには、何をしゃべるの」

ココアが柿田に顔を向ける。表情は少女のそれに変わっていて、よく見れば可愛い顔をしている。

「あとはカラスの鳴き真似ぐらいかな」

視線を感じて横を見た。芝生にシートを敷いて弁当を広げていたカップルがクスクス笑っている。稲本女史も手で鼻を抑えながら、笑いをこらえている。だがココアは笑わない。「またしゃべらないかな」などと言ってかごに顔を近づけている。そんなココアに目を細めていた稲本女史が、ふいに柿田に顔を向けた。いつもは見据えるといった感じの眼差しが、今日はどこか潤んで見える。

「柿田さんは、ご趣味はほかにおありなの？」

「いや、特には」

「柿田さんって、ほら、こだわりの人だから」

揚げ物のことを言っているのだ。揚げ物担当の柿田はバッテリー液を薄めて使う。バッテリー液とは小麦粉、卵、水をあらかじめ混ぜ合わせたもので、業務用となると、パン粉の付きが良くなり、衣も厚くなる。衣を剥いでみれば、中には貧相なエビしか入ってなかったなんてことがあるが、バッテリー液が濃すぎるのだ。もともと、バッテリー液を薄くすれば火加減は難しくなり、衣を焦がしてしまうことも少なくない。

「いつもすいません」

何となくいたたまれなくなって、席を立った。

「それにしても、ここは空が広いですね」

両手を伸ばし、空を仰ぐ。西方を望めばどこかしらに山が見えた。埼玉とは違い、ここは遠くまで遮るものがない。柿田が最初に千葉を肌で感じたのは、土地が平坦であるがゆえの空の広さに気づいたときだった。

「そっか。柿田さんって、埼玉の人だったのよね」

その言葉に振り返ると、稲本女史のほほえむ横で、ココアがピーサンに何か話しかけていた。

ココアと会った日以来、稲本女史は二人きりになったときだけピーサンの話を持ち出すようになった。女性店員の受け売りを交えながらあれこれ話題提供する中で、稲本女史が興味を示したのは同調の習性だった。野生のインコは多くの仲間と暮らし、仲間と同じ行動をとることで身を守っている。よってピーサンもこつちが食事をすれば一緒に餌を食べるし、テレビで人の会話が始めればその輪に加わろうとする。

「でも、人間も同じじゃないかしら。好きな人のやってることは特に真似したくなる。私もインコを飼おうかしら」

稲本女史はそう言って、「嘘よ」、顔を伏せたままバック容器を作業台に並べ始めたのだった。

弁当箱を仕舞ってスマホを開くと、月にいちど入る娘からのメールに優斗の写真が添付してあった。先月、三歳になったという。

女房の不義理が発覚し、開き直られた挙げ句に家を追い出されたのは柿田のほうだった。妻の実家が営む鉄工所に勤めながら妻

の実家に間借りしていたわけだから、離婚を機に家を出るのは当然としても、無職の人間に親権は渡せないとなって娘まで奪われたのには納得がいかなかった。だが親のない柿田をずっと世話してくれた義父に見舞い金として五十ほど包まれ、頭まで下げられてしまうとも何とも言えなかった。当時高校生だった娘はそんな顛末をどう思っていたか、父親との交渉をいまだに細々と続けてくれている。

優斗は見れば見るほど子どもの頃の娘に似ている。そういえばピーサンの一つ覚えである「カッワイー」は娘に対して使った言葉だった。寝る前にそう言って抱きしめる。それがお休みの合図だった。

「お疲れ様です」

パートのおばちゃんと言って立ち上がった。調理場に出ていたほかの二人が休憩室に入ってくる。昼休憩は五十分あるが、実際は四十分ほどで後半組とバトンタッチするのが習わしになっていた。

「稲本女史は？」

おばちゃんが作業衣を羽織りながら聞く。

「クレーム対応」

一人が言うのと、もう一人が「いつものおじいさんだよ」と言うて顔をしかめた。

「今日は何？」

「春雨サラダの味付けがしょっぱ過ぎて、これじゃ高血圧で死んでしまう、だって」

「それ私だ。じゃあ、行かないと」

おばちゃんが顔色を変える。

「あんたは行かなくていいよ」

「お堅くて融通は利かないけど、あの責任感だけは見上げたもんだよね。わたしらパートには絶対矢面に立たせないものね」

稲本女史のことを言っているのだ。

「あの責任感と潔癖症が仇になることもあるけどね」

一人が意味ありげに言うのと、

「あれじゃ、男も寄りつかないだろ」

もう一人が声立てて笑った。では、あんたらは男にどれだけモテたのかと聞いてやりたくなかったが、生活苦の漂うおばちゃん達の顔を見ていたら、ふいの怒りも鎮まってしまった。平均年齢六十五歳のおばちゃんトリオに悪気はないのだ。

バック容器を手にくどくど文句を言ってきたのは、いつものおじいさんではなかった。

「それにしても貧相よね。こんな痩せたトンカツ見たことないわ」

「衣を薄くしてますので」

「容器ががら空きじゃない。もっと実態に合った小さいのにしたら」

柿田が揚げたてのトンカツを並べているとき、はじめて見る婦人に声をかけられた。かれこれ十分経っている。

「容器は工夫の余地があるかもしれませぬ」

「何のつもりで衣をケチってるわけ」

「ケチってるわけじゃなくて、衣で嵩上げしたようなものをお出ししたくないだけです」

「だったら、最初から肉を大きくすりゃいいでしょう」

「予算の関係があるものですから――、申し訳ありません」

柿田は頭を下げた。

「お客様の意見はごもっともです」

稲本女史だった。いつの間にか柿田の後ろに立っていた。

「形ばかりよくても実際は衣だらけ。そんな揚げ物はお出ししたくないとそんな思いでやってまいりましたが、その結果が貧相な揚げ物というのでは、これまたお客様に対して失礼です。かといって、このような個人経営のスーパーですから予算もございません。どうか当店が成長するまでもう少し時間をください。それまでは優良他店でのお買い求めをお願いします」

「ここじゃ、買うなっこと」

婦人は色めきだった。

「おっしゃるとおりでございます」

稲本女史が言って一礼したときだった。ふいに拍手が湧き、

「あんたのトンカツ、俺は好きだよ」

「おっさん、これからも頼むよ」

そんな声が柿田の耳に届いた。柿田が深々と一礼して顔を上げると、婦人は背を向けてもう歩き出していた。その先を背広姿が行く。店長だった。応接室に案内し、詫びの品でも渡すのだろう。

「柿田さんって、変わってるよね」

パートのおばちゃんの一人が言った。

「マニュアル破ってまで、こだわりを持つってのは結構なことだよ」

「そうだよ。そんな人だから、ピーちゃんものぼせ上ってるんだろ」

いつものようにそこで笑いが起きる。

「でも、稲本女史の対応は見事だったね」

「あのご婦人気取りの女、拍手にひるんで顔を引きつらせてたろ。ざまーみるってんだ」

そこまで言っただけで気が済んだのか、おばちゃんたちはそれぞれに帰り支度を始めた。

長い冬が終わって暖かくなると、ピーサンの動きは逆に鈍くなった。飛ぶことには相変わらず消極的だし、肩にも乗ろうとしない。鳥専門の病院に連れていき、「ぜんぜん飛ばないんです」と訴えると、

「飛ばないんじゃないんで、飛べないんです。七十グラムはさすがに異常です。三十七、八に落としてください」

女医はびしゃりと言った。

「どうすればいいんでしょう」

「餌は、朝夕二グラムずつ。昼間は餌箱を撤去してください」

ピーサンは納得しなかった。休みの日などに見ていると、餌箱をぶん投げる作戦に出たり、「クオー、クオー」とカラスを真似て哀愁を漂わせる作戦に出たりした。そんな話を聞かせたからか、今日の稲本女史は引かなかった。今週末に柿田のアパートに来る

という。断ることもできたのにそうしなかったのはわけがあった。

数日前、昼休憩に稲本女史だけが戻って来ないことがあった。聞けばまたしてもクレーム対応だという。

「ただし今回は店長」

なるほど調理場では店長と稲本女史がエビフライを前にして何か言い合っていた。

「本物志向の何がいけないんでしょう」

「バター液をあんなに薄めちゃ、形がやっぱり貧相になるよ」

「いくら見栄えが良くても『看板に偽りあり』では、お客様の信頼を失います」

いっぴく強口調の稲本女史に、

「柿田ちゃんも頑固なら、あんたも——、まあ、責任者さんにお任せするけど、もうちょっとうまくやってよ」

店長は不満たつぷりに返して調理場を出ていった。きっと客から直接文句が入ったのだ。気配を感じてか、稲本女史が振り向いた。だが稲本女史は何も言わなかった。柿田が口を開こうとしたとき、

「夕方は雨らしいから、サラダは減らしましょう。煮魚は早めに値引きしてください」

稲本女史はそれだけ言うと、

「こんどピーちゃんに会いに行ってもいいかしら」

最後にそう言ったのである。

男所帯の殺風景な居間の座卓に、稲本女史が持参したシヨートケーキを挟んで二人は向かい合っている。座卓の端には鳥かごがあつて、ピーサンも同席した形だ。紅茶でもと思つたがうっかり切らして、仕方なくコーヒーを出したところだつた。

「読書家のね」

書棚を見上げて稲本女史がくすりと笑う。『恐竜図鑑』『恐竜学』『恐竜と古代の生物』『恐竜と隕石』『羽毛恐竜』——。整然と並ぶ中に『かもめのジヨナサン』も見えていた。聞かれもしないのに「ピーサンも先祖を辿れば恐竜に行き着きます」などと言つてみるも、稲本女史は聞いていなかった。

「柿田さんつて、きれいい好きなのね」

部屋の隅には鳥かごを載せる幅広の台がある。その右端には餌が、左端には敷物用の新聞紙が一枚一枚折りたたんだ状態で積んである。

シヨートケーキをフォークですくい取つたところで「同調の習性つてこれのことね」と、稲本女史が言つた。ピーサンがしきりに餌をついばんでいる。客の前で機嫌を損ねられても困るので、今日は特別に粟玉を与えてある。こちらがケーキを口にせずともピーサンは貪り食つていたはずだ。

「そのうち、こっちの会話を真似てゴニョゴニョ言いますから見てください」

だが稲本女史はすぐにかごから目を離し、「柿田さんはどうして再婚されないの」と、いきなり直球を投げてきた。柿田がバツイチであることはみな知つている。

「こいつがいますから」

かごに顎を向ける。

「奥さんがいちゃいけないの？」

「インコは飼い主を配偶者扱いするんです」

「ピーちゃんはオスでしょ。つてことは——」

「そうです。こっちは女房役です。女房が二人も三人もいたんじゃ、收拾がつかなくなります」

稲本女史は声立てて笑つた。ブルーグレーの眼鏡から柔和な瞳が覗く。職場での稲本女史とはやはり別人に見える。

「稲本女史こそ」

「女史つていふのはやめて」

「失礼。稲本さんこそ、どうして」

言うに事欠いて、つい口走る。なぜか鼓動が速くなる。

「振り向いてもらえないの。いつもそう。それに怖い気持ちもある。私もいちど失敗してるから」

「ピーサン、カッワイー」

ピーサンだつた。稲本女史が「すごい！」と言つて手を叩く。

「クオー、クオー」

腹も膨れてご機嫌なのだ。ピーサンは首を激しく振りながら、おしゃべりを連発した。

「結婚のご経験があるとは知りませんでした」

「ほんとうは子どももいるの」

これがココアだという。

離婚したあと鬱症状に見舞われ、乳飲み子だつたココアを育て

られなくなった。そこで妹夫婦に養育を頼んだ。ココアを引き取れるまでに体調は回復したが、子どもに父親は必要だろうということになって、子どものできない妹夫婦の養子とすることにした。

「そのことをココアちゃんは——」

「知らないわ。あんな子だから、知ればもつとひねくれる。でも、最近はおわつてきたの」

稲本女史は笑みを浮かべた。インコは反対されてあきらめたが、そのかわりココアはいま、メダカに夢中なのだという。

「ピーちゃんのお陰よ。生きものになんかまったく興味を示さない子で、でも、あの日以来、凶鑑なんかを開くようになったの。最近はお人にも優しくなつて、だから、お友達も増えたみたい」

「じゃあ、最初からココアちゃん情操教育というか、その——」

「正直に言うところ。でも、薄衣揚げの名人さんにも興味があった」

稲本女史はいたずらな目をした。柿田はその気になってドギマギしていた自分に腹が立った。それが顔に出たのか、稲本女史は急に真顔になり、ただの興味だけで男のアパートを訪ねたりするものかと口調をあらためた。そこに再び艶めいたものを感じて言葉を出せずにいると、「力を貸してほしいんです」と、稲本女史がこんどは身を乗り出してきた。

話はこうだった。こんど惣菜専門の店を出す。貸店舗がこの近くにあつて、仮契約も済んでいる。ココアが本当のことを知るまで、何か挑戦している誇れる自分でいたい。ついでに店を手伝ってくれないか。

「カッワイー」

ピーサンだった。会話に参加したつもりだろうが、言ったせりふには共感できなかった。

「考えさせてください」

気づけば、そんなふうには柿田は答えていた。

この夜、ピーサンは餌をあまり食べなかった。異変に気付いたのは風呂上がりにかごを覗いたときだった。ピーサンは止まり木から降りて、かごの隅にうづくまっていた。ぼさぼさの羽を異様に膨らませ、目を半分閉じている。駄目かも、という直感があった。

「ピーサン、ごめんな。ありがとな」

何となくそう呼びかけた。ピーサンはいちど目を大きく開け、すぐに閉じた。カバーをかけてやり、その上に衣類を何枚か重ねた。

夜中に目覚めたのは、虫の知らせというよりは、本当に音がしたからだった。ピーサンは生きていた。急に明るい照明に切り替わって、一瞬ばつの悪そうな顔をしたが、何食わぬ顔で餌を食べていた。

梅雨が明け、日差しはすっかり夏のものになっている。上総東級公園でココアと会うのはこれで四回目となるのか。

アパートにやって来たあの日、稲本女史は揚げ物へのこだわりを引き合いに出し、一事が万事だと言って柿田をほめた。だが柿田に他意はない。総菜の揚げ物が女房のつくるそれとあまりにも違うのに驚いて、何とか女房のそれに近づけようとしているだけ

だ。それにどうせ顎で使われるのだ。稲本女史の誘いを受け入れる気にはどうしてもなれなかった。すると、ココアをときどきピーサンに会わせてやってほしいと、稲本女史は最後にはそんなことを言ってきた。下僕になるのは御免だが、情操教育に一役買うぐらいならと思って、柿田はそれには首を縦に振った。

ココアは唐揚げとコーラを前にしてご機嫌だった。いじわるな感じはどこにもなく、よく見れば尻尻に柔らかさがある。誤解されやすいのは母親ゆずりか。一方、ピーサンはココアに慣れたと見え、饒舌だった。一つ覚えのワードを連発してココアを喜ばせている。

「私のこと覚えてくれるかな」

ココアはピーサンに「ココア」と呼びかけた。

「だったらゆっくり言っただけでいいよ。コ・コ・ア・ちゃん」

声がひっくり返ってしまい、稲本女史に笑われる。だがココアは大真面目に「コ・コ・ア・ちゃん」を繰り返す。

「娘さんはお元氣？」

稲本女史が話題を変える。

「育児に追われてるみたいですよ」

娘がいることも職場の人間はみな知っている。ただし初耳の人間がここに一人いて、それがココアだった。

「おじさん、子どもいるんだ」

いつの間にかこっちに顔を向けている。

「離れたところにね」

「うちの伯母さんもいるんだよ」

「えっ」

「すぐ近くに」

ココアは言っただけで、コーラに口をつけた。稲本女史はウーロン茶のペットボトルを手にしたまま動けずにいる。

「写真とか処分してないんだもん。ばれるに決まってるじゃん」

ココアは涼しげに言い放った。

「大丈夫。私、お母さんが二人いるぶん、得してると思ってるから。ねーピーちゃん」

ココアはもうかごへ向き直っていた。

ガラス越しに、今日もわれ先にと総菜売り場に押し寄せるお客さんの姿が見える。

《当店の揚げ物はすべて薄衣揚げです。形は貧相で、どれも小ぶりですが、味には自信があります。どうぞご賞味ください》

そのようなポップを作ったのは店長だった。見た目は悪くても、分厚い衣で嵩上げされてないトンカツやエビフライは人気を得て、売り上げはかつての倍になっていた。店長が稲本女史から退職話を持ち出されたのはそんな矢先のことだった。しかも、もう一人辞めると聞かされ、頭を抱えている。さすがに申し訳なく思い、引継ぎだけはしっかりやろうと柿田の帰宅は連日遅くなった。よってかまってやれなかったからか。店のオープン前日にピーサンは逃げてしまった。部屋に放していたとき、洗濯物を取り込むうとして窓を開けたのがいけなかった。ピーサンはモンシロチョ

ウのような頼りない羽ばたきを見せて飛び去っていった。インコは聞き慣れた声に反応すると聞いていたから、その日は外で名前を呼び続けた。だが戻っては来なかった。

お客様に対して嘘偽りのない、真心を込めお惣菜をつくる——。その決意そのままに、店の名前は「まごころ亭」とした。

間口一間半の小さな店の前には、『当店の総菜はすべて無添加につき、日持ちしません』との看板が掲げられている。それでも開店初日の日曜日は大勢の客を集めた。ココアも朝から駆けつけ、「いらっしゃいませ」と、店の前で大声を張り上げている。

「トンカツ五、エビフライ十」

稲本女史が容赦なく叫ぶ。作り置いたものはぜんぶ売り切れたため、ここからは注文を受けてからの作業となる。バター液は使わない。小麦粉、卵、パン粉の工程を守って記憶の味を目指す。焦がさないよう注意する。

寝不足のため、集中力がすぐ切れる。今朝は四時に起きて、町内を歩き回った。このままピーサンが見つからなければ、張り紙を作って情報提供を求めつもりでいる。懸賞金を出すことも辞さない考えだ。だいいち、稲本女史とココアにはどう伝えたらいいのか。

「ありがとうございました！」

ココアの声が店先に響く。と、その直後、「えっ、どうしたの。何でいるの」と、ココアが何やら騒ぎ出した。振り返ると、そのココアが店内に入ってきて来るところだった。半分困惑顔なのは、状況が解せないからだろう。肩に黄色い何かを載せている。

「ねえー、ピーちゃんが来たよ」

「えっ」

ほうれん草の白和えをパックに詰めていた稲本女史が顔を上げる。

「あら、やだ、どうして？」

ピーサンは小首をかしげたり羽づくろいをしたりして、どこかホッとしているように見える。つまり、ジョナサンではなかったのだ。自由ではなく、囚われの身として生きることをピーサンは選んだのである。

「柿田さんは手を休めないで」

稲本女史の厳しい声が飛ぶ。

「了解！」

柿田は、元気に返事をした。